昭和63年３月 第10号
海蔵社協通算 第31号

地区広報 かいぞう

よりよい子どもを育てる

―― 海蔵小学校校長　早川正水 ――

新しい体育館が完成しました。建設委員会の方々をはじめ関係各位、地区の皆様方のご熱意とご尽力の賜と、衷心よりお礼を申し上げます。

子供たちの喜びはむろん、この新しい体育館が従来にもまして、地区のさまざまな行事をはじめ、スポーツ等に活用されることを願ってやみません。

本校は、これまでも、自分から進んで「よく考える子」「思いやる子」「体をきたえる子」をモットーに、「真剣にやりぬく子」をめざして努力している。その日々の実践の中で、特に痛感されるのはいまの子供たちが、「我慢する」力が弱いこと、「物を大切にする生活態度」ができていないことである。

子供たちが悪いことをしたり、しようとしていたら、どうか、声をかけ叱ってやってください。地区の皆様のお力添えによって、すこしずつでも「よりよい子供」になるように努力していきたいと思っています。

編集・発行―四日市市海蔵地区市民センター・海蔵地区社会福祉協議会

自治会による防災訓練

海蔵地区連合自治会

六十二年八月三十日に、当地区自治会は、末永町海蔵南公会所広場において、末永町本郷町の住民の方々のご協力を得て、防災訓練を行いました。

当日は、まだまだ夏の日射しで、三十度を超える炎天下の中で実施しました。九時に防災訓練のサイレンが鳴り響き、住民はヘルメットや帽子をかぶって、公会所広場へ避難集合。息をきらして走ってくる子供たちや、杖をついて参加されたお年寄りの方々、また、エプロン姿のご婦人方など多数の人たちに参加いただきました。

地区の防災意識の向上を図るべく自治会長の訓辞の後、婦人会指導による炊き出し訓練、消防職員指導による応急救護訓練などが行われた。

特に救護訓練では、人形を使って人工呼吸の方法を教わり、児童のいる奥様方は、真剣な眼差しで見学されていました。あるご婦人は、子供が遊んでいて川に落ちたとか、高い所から落ちたとか言った時には、気が動転し、うろたえる人が大半ではなかろうかなあと話されていました。

救急車を呼ぶことはあっても、救急車の到着までに、応急の処置をすることが大事です。「災害は、忘れた頃にやってくる」といわれます。

日頃の家庭における防災に対する意識は、住民一人一人が「自分たちの命とまちは、自分たちで守る」という心構えが、必要かと思われます。

社会福祉協議会

同和教育推進部の研修会を開いて

同和教育推進部部長　舘　増　男

昨年十二月十日、人権週間の最後の日に、地区社協の事業の一環として、同和問題の研修会を開き、各種団体関係の方々など六十人ほど参集いただいた。人権週間とは、第二次世界大戦が、人間の自由に対する圧迫や人権侵害が原因であったとする反省から、人権保障が平和のために大事だとされ、四十年前に定められたことである。

急速な経済発展とともに、生活は豊かになり、国際化も進みはしたが、私の身の回りの事象の中には人権侵害、人格を無視するような言動が見受けられる。子どものいじめ問題、人種にかかる偏見、部落問題に関する特異な意識など、人件尊重に暗い影のあることを見落としてはならない。

性別による差別、職業差別、障害者差別など、見えやすい差別解消については、それぞれの機関や行政等の努力によって成果がみえてきたように思われるが、同和問題の解決の中には、形は進んでも中身が伴わないことがある。

「私たちの町の周辺にはそんなところや、出身者がいないから関係ない」といった声も聞かれる。研修会講演会も、「またか」など頻繁に開催される反面、なぜ同和ばかりといった声もしきりである。国民的課題、市民的な課題といわれながら基本的な意識の変革は、まだ前途多難と言わざるを得ない。

学校の教科書には同和問題の起因が明記され、民主的な人間の育成に努力が払われているが、いじめ、暴力の様相からは、互の人格を認め合う行動には不信感がうかがえる。知識と実践のずれなのか、自分さえよければという利己主義的な偏見なのか。大人社会の物の見方、考え方の反映ではと見る向きもある。

人はそれぞれ成育されてきた環境や条件も違う。能力差、個人差もある。だが、人として人格形成に努力を積み、世の中に精一ぱい生きる姿こそ大切ではないでしょうか。

誤まり伝えられたことを鵜のみにしたり、一つの失敗を、さもその人の人格としたりする偏見を、私たちは持っていないでしょうか。

豊かで明るい地域社会づくりは、よりよい人間関係を深めることから。社会福祉の心もこの辺りからだと思います。今後もよろしくお願いいたします。

文化祭開催のおしらせ

本年11月中旬に社協主催の文化祭を開催する予定です。
詳細については社協総会にて決定次第おしらせいたしますので
作品の出品をよろしくお願いします。　―海蔵地区社協より―

老人クラブの活動

老人クラブ 若生会

老人クラブ若生会は、会員相互の親睦の活性を養うものであります。

老人会は、いつもゲートボールばかりやっている会ではありません。会では、旅行も国内から海外へと、またカラオケや趣味の作品展など、文化行事も計画し、みんな元気な顔をそろえて参加をしています。

昨年五月十一日・十二日に、長野県善光寺へ、バスで五十人の参加を得て、旅行をしました。バスの中では、ガイド嬢の説明もそこそこに、唄は出るし、それはもう賑やかな旅でした。長野へ着いた時は、もう夕方で、その晩は「山田温泉」にて、のんびり一夜を過ごしました。

翌日は、善光寺へ参拝し、物故者の霊を三重の塔に納めて、みんなで手を合わせ、とむらってきました。

こうした旅行を振り返りますと、人との交流、また友情を大切にし、老人達の憩いの場をと次の計画を考えております。

また会では、雑布を年に千二百枚作って、小学校や老人センターなどの施設へ寄贈し、さ少ながら、お役に立ちたいと力を合せております。

陽気の良い時は、社会奉仕活動などに一丸となって、清掃作業等を行い、汗を流して専念しております。

こうした行事に参加し、みなさんの壮健で、愉快な日々を送り、明日への希望をもってこそ若生会は、ますます活躍いたします。

補導委員会とは

補導委員会
会長 嶋津 義正

当委員会の委員は、地区内の各町より選出された四十余名により構成されております。

広辞林で【補導】という名詞を引いてみますと、―青少年が悪の道に踏み込まないように指導すること。― とありますが、一般的には、非行行為を摘発し善導するということですが、「摘発」という言葉は、暗いイメージが、先行定着しているようにも感じられます。

地区補導活動は、非行行為を未然に防止することが主目的で、その摘発、またその抑止のための巡回等は、あくまで従である。といっても過言ではないと、考えております。

したがって、当委員会としては、青少年育成協議会等の諸団体、及び諸機関と緊密な連携をとりながら

❶普段から地域の子供たちに目を向けてゆく活動。
❷非行防止の啓発・啓蒙活動。
❸環境浄化活動。
❹危険防止活動。
❺補導、巡回活動。
❻情報活動。
❼自己研修活動。

などの推進を全委員がそれぞれの地域で、その核となるべく地道な継続活動を行なっております。

当委員会の主旨に、ご理解を賜り、地区の皆様方のご協力、ご支援を心からお願い申し上げます

心のふれあいはあいさつから

婦人会会長 藤田すず子

日頃は、婦人会の諸活動に対して、みなさまの暖かいご協力と深いご理解をいただきまして、厚くお礼申し上げます。

海蔵地区婦人会では、四日市市婦人会連絡協議会の五つの努力目標の一つである「美しい住みよい街づくり」に、特に力を入れてまいりました。

毎年四月の始めの海蔵川堤の清掃、小学校横の堀川に投げ捨てられた空瓶、空缶の清掃、あるいは路上の空缶ひろいと取り組んでまいりましたが、捨てる人が断えない現実を見ると、ポスター、立札で注意を促すよりも、一人一人が「ごみを捨てない」というタスキを心に掛けることが第一ではないかと思います。

今年度は、五つの努力目標の中で挨拶運動を重点に取り組みたいと考えております。「おはよう」「こんにちは」「ありがとう」といったあたりまえの一言によって心と心のふれあいの輪を広げるよう、お互い努力することによって明るい地域社会がつくられていくのではないでしょうか。

婦人会の会員は申すに及ばず、地域にお住まいのみなさま一人一人の努力と実行によって、一歩一歩前進して実のある運動が広がることを願っております。今以上に海蔵地区が明るく、美しい地域に発展することを、強く願ってやみません。

地区別懇談会

青少年健全育成協議会
会長 太田南海雄

青少年健全育成協議会は、青少年の健全育成に寄与する団体の集合体で、保育園の保護者会、幼稚園、小中学校のPTA、育成会、補導委員会、社会教育推進員等で構成されております。

本年の行事としては、十一月末日から十二月初めにかけて、諸団体の役員さん、地区の皆様方のご協力をいただいて、地区別懇談会（映画「親の知らない世界」と懇談「子供たちのすこやかな成長を願って」をテーマに）を開催しました。

いま、世の中は豊かになった、一部にひづみはあるものの衣食住は充足されたが、それなら子供たちも、それに応じて幸せになったか、逆なのだ、貧困や飢えに代わって子供たちを苦しめる様々な問題が出てきている。小中学生の校内暴力、いじめ、登行拒否、無職少年の非行等があたりまえの常識になっている有様です。地区の皆さん方のご協力によって、この様な非行を最小限にくいとめるため、町別懇談会をもつ機会ができたことは、本当によかったと思います。

今後とも、青少年の育成に強い関心をもっていただきご協力をお願いします。

秋の連合大運動会スナップ

▲山梨社協会長より優勝旗授与…野田町へ

▲高齢者と子どもの玉入れ

▲みごと一位でテープ切るこのよろこび

▲「かしら右ー、」堂々の入場行進

▲力いっぱいの町対抗つなひき

▲秋の日ざしの中、一日のんびり見物

▼障害物競走、このジャンプおみごと

▲「おとと…」応援受けてリレーに一生懸命

体育指導員の活動

体育指導員　伊藤二三男
木村　高美

私たち体育指導員は、市町村におけるスポーツ振興のため住民一般に対しスポーツについての理解を深め、実技の指導助言を行なうほか、その他スポーツ団体の行事の求めに応じて協力しています。

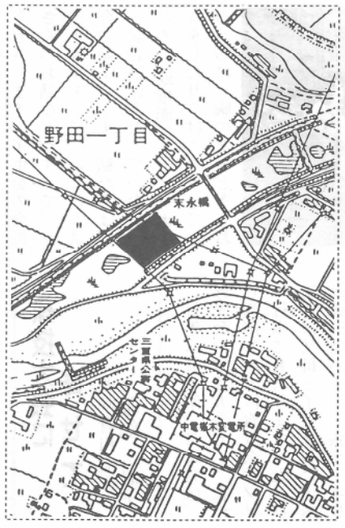
例えば、市で行なう壮年婦人ソフトボール大会、体育の日の市民体育祭、障害者スポーツ大会、老人ゲートボール大会、いろいろな研修会等への参加。

海蔵地区におきましても、各地区から選出された男女三十人の体育振興会の役員の方々と一緒になって、地区のスポーツ振興に努めています。

海蔵地区も市の方針と同じく、私たちのソフトボール大会は、年内行事として行ない、また、その他の団体の行なうスポーツ、例えば、毎年行なう夏休みの子供会の球技大会、社協主催で行なわれる運動会等の行事にも振興会が審判と決勝係を担当し協力しています。

私たちのソフトボールも、役員及び会員の方々、また、県・市のみなさま方の協力によって、二面の海蔵グランドが昨年十一月二十九日に完成しました。

グランドができたことにより、地域のソフトボールも、今まで以上に盛んになり、みなさま方に十分楽しんでいただけると思います。心身の健全と地域における親睦のため、みなさまの中で会員希望の方は、地区の役員まで申し込んでください。



四月　春季大会
五月　三泗野球少年団運動会
七月　夏季大会
八月　長島温泉（親善）旅行
九月　秋季大会

海蔵レインボーズ行事

海蔵レインボーズ父母の会
会長　金原　時之

冬、寒風吹き荒ぶ厳寒の中、夏、真っただ中、炎天下。

この一年間、毎日の練習にもめげず「うまくなりたい」という願望のもと、子供たちはみな一生懸命でした。一人一人の頑張りに拍手を贈りたいと思います。

子供たちにとって一番楽しかった行事は、一泊二日の長島温泉だったようです。

一日目は、乗り物券を手に、ジャンボバイキング、シャトルループ等、お目当て目指し、遊園地へ飛び出して行きました。そんな子供たちを、夏の夜空を彩る艶やかな花火が歓迎しているようでした。

翌日は、海水プールで思う存分泳ぎ、この二日間で、一年分の遊びを消化すべく、遊びに興じ満喫したようです。

私たち役員は、この喜色満面の子供たちに満足し、きっと小学生時代の楽しい思い出の一つにこの旅行を加えてくれることと確信し、嬉しさひとしおです。

小学校での野球部生活が、中学校生活において「いしずえ」にならんことを祈ってやみません。

全国大会に出場

海蔵バレーボール少年団
監督　山根　広文

昨年は、『第七回全日本バレーボール小学生大会』に、三重県代表として、全国大会に出場を果すことができました。この大会は、過去六回、一志郡勢が全国大会出場を独占していましたが、打倒一志に闘志を燃やした我が海蔵が七回目にして、三重県大会優勝戦でやはり一志の中川小を破り、念願の東京キップを手に入れることができました。東京駒沢体育館の開会式は、超満員にふくれ上りグリーンのユニホームの三重海蔵は、堂々の入場行進をやってくれました。当地では、中京テレビがネットしていたので多くの方に見ていただいたことと思います。

予選リーグ戦が始まり、初戦は今大会優勝候補の香川県代表志度小。苦戦を強いられましたが、フルセットの末勝利をおさめ、決勝トーナメントに進出することができました。

二日目の決勝トーナメントの一回戦は、鹿児島県代表の小山田小。予選リーグ戦を勝ち上ってきたチームで、やはり強く、一セット簡単に取られましたが、逆転勝ちし、三重県勢としては、初の二回戦進出です。相手は奈良県代表の上牧小。五月の交歓試合では、互角の勝負でしたが、本戦では惜しくも破れてしまいました。

体育館がなく、練習不足の選手諸君は、本当によくやってくれました。もう一つ欲を言えば、他県はバスで五台、十台と応援団を送ってくるのに、我がチームは父兄だけとちょっぴり淋しい思いをしました。

◆親子卓球教室◆

海蔵卓球スポーツ少年団

代表コーチ　後藤　哲男

昨年十二月五・六日の両日四日市市少年自然の家主催の「親子卓球教室」に当少年団の小学生と友人、父母、コーチ六十人が参加しました。

山と森林に囲まれた、水沢の少年自然の家は、真新しい建物で全員の目を見開かせ、今から始まる行事に期待を抱かせた。

入所式、オリエンテーションが終わり、各自は割り当てられた部屋へ入った。広々とした部屋の造りに大変満足したようです。

夕食後、鈴鹿市からこられた佐々木先生により遊びとゲームを兼ねた準備体操が始まり、楽しいムードの中で、コーチの実技指導により基本をわかりやすく説明を受け、ロボットマシンを使って練習をしました。休憩の時には、リクリエーションゲームが入り、笑顔の内にあっという間の、三時間が過ぎました。

翌朝は、六時半の起床に始まり、朝のつどい、朝食では集団生活でしか味わ得ない、忙しさの中で全員がきびきびした行動でした。

最後に親子ダブルス親善試合が行われたが、子が親を助けたり、親が子供をきづかったりと親子ならではの風景があり、この二日間での最高のムードであった。

全員のアンケートには、もっと泊りたい、また来たいなど多く書かれており、子供たちにとって忘れられない、一泊二日の教室であったことでしょう。

海蔵サッカー少年団の活動

海蔵サッカー少年団
監督　松永　保

毎年三月、新入団員を迎え、サッカー少年団の一年が始まる。年間行事の大綱として、前・後期リーグ戦、四日市招待試合、合宿、正月大会、新人戦、練習試合を消化し、六年生の卒団式で幕をとじる。

まず、前期リーグは、一部、二部に各々一チームずつ出場した。

四日市招待試合では、歴代チームがなし遂げることができなかった大会に、激戦の予選に勝ち抜き、見事出場権を獲得した。

鈴鹿スポーツセンターで実施した合宿は、厳しい中、和気あいあいで終了。

後期リーグには、前期二チームに加え、ちびっ子チームを編成し試合に臨んだ。

年明けの正月大会は、六年生として公式戦最後の試合であり、良き想い出となったでしょう。

二月に行なわれる新人戦は、選手、父母ともに期待のかかる試合です。

最終行事として、三月に六年生の卒団式を行なう。

卒団する彼らには、サッカーを通して培った、人との和、実行力をいつまでも持ち続けて欲しいと切望します。

現団員五十四名、「競り勝て海蔵イレブン」をモットーに練習に励んでいます。

育成会活動

育成会
会長　加納　重男

子供育成者連絡協議会（育成会）も、昭和三十七年に発足し満二十五周年を迎えることになりました。

地区目標は、「各地区育成者の連携を図り子供の健全育成を推進する」とあり、会員は幼少中合わせて九百十三名、育成者二百五十六名で活動し、本年度の主な行事は、五月子供祭りに参加、六月社会見学（鳥羽イルカ島七百三十名参加）、七月キャンプ（尾高高原三百三十名参加）八月球技大会、三月オリエンテーリング、各種研修会（子供会、同和、安全等の問題）でありました。こうした行事を通じて、親と子の親睦、健全育成を図るものであります。

私達育成者は、子供達の意見を取り入れ、遊びの中から自主性、創造性を養い、又「子供達の手による活動の場」を与えることが、真の目的だと思います。

今後とも目的達成のため、育成活動を推進したいと思います。私達は、育成指導の立場にたって、次の世代を担う子供の成長を願い、「心豊かな思いやりのある」子供に育つよう頑張りたいと思います。

社会見学に参加して

西阿倉川四区
鈴木由利子

今年の社会見学は、六月七日「鳥羽のイルカ島」でした。

総勢七百人という参加者で、電車の中では、友達の車輛へ行ったりして、大変盛りあがりました。

子供たちは、イルカ島へ到着するなり、昼食をするのもそこそこに、イルカショーとミニオリエンテーリング、そして水遊びと楽しみました。

ミニオリエンテーリングでは、チェックポイントを設けて、「全部ハンを集めたら賞品がもらえるのだ」と、喜んでいて、みんな口々に、「おもしろかったなあ」と言いながら、汗だくだくになって、帰って来ました。

帰りは、イルカ島から鳥羽湾をめぐり、船内は、子供たちの歓声でわきたっていました。

来年も、社会見学に「参加したい」と子供たちは心待ちにしています。ぜひ楽しい企画を立てていただきたいと思います。

キャンプに参加して

六年生
大塚妙緒里

私は、今年はじめて、子供会のキャンプに行きました。テントでねるのが、二回目だけど、なんだか不安でした。でも、みんなと、いっしょにねて、夜おかしなど食べて、おもしろかったです。

一番はじめについた時、川へあそびに行って、私は水着を持って行かなかったので、はじめのうちは、岩にのってみんなとあそんでいたけど、あつかったので、服のままで入りました。そして、こんなにおもしろいんだから、はじめから入ればよかったなあと思いました。

夕食の用意をしている時、水の入れかげんとか、わからなくておばさんにききました。そして、勉強しながら作ったカレーは、生のにんじんとか入ってたけど、おいしかったです。朝食の時のみそ汁は、全部食べてしまいました。

キャンプファイヤーの時も、いろいろなしらない楽しいあそびをして、すごしました。そのあとのきもだめしは、とってもこわかったです。ただ行くだけなら、こわくないんだけど、行く前に、こわい話をきいたのでこわかった。そして、お堂の所の文字を読まなきゃいけなかったけど、こわいので読まずに行きました。

こんなに楽しかった、キャンプ、一ぱく二日じゃなくて二はく三日とかだったら、もっと楽しかったなあ。

球技大会を振り返って

五年生
大河内　香

そうなのです。とうとう私たちのチームが優勝することができたのです。今、思いかえしてみても勝てるなんて思っていませんでした。

今年も、よく晴れた八月二日、小学校の校庭で開会式がありました。開会式でみる他のチームは、たすきをしめたり、そろいの帽子をかぶったり、ユニホームをそろえたり、どこもかも強そうで、胸がどきどきします。子供会の会長さんのお話などがすんで、ラジオ体操をして、いよいよ試合の始まりです。私たちは、一試合目にあたっていなかったので、幼稚園でキャッチボールをしたり、けったりしているうちに、胸のどきどきもおさまってきました。

一試合目は、お父さんやお母さんの応援をうけて、一生けん命しているうちに終わっていました。

「次もこの調子でいこうね」とみんなといい合いました。そして、いよいよ優勝戦になりました。相手のチームは強そうだけど一生けん命でした。気がついたら七回のうらでした。「この回をしっかり守るんだよ」というかけ声で、ワンアウト、ツーアウト、三るいでスリーアウト、「やったア」とうとう勝てました。チームの一人二人が涙をこぼしていました。

球技大会に寄せて

西阿倉川五区
服部　恵子

毎年八月の第一日曜日は、育成会の球技大会です。私たち西阿倉川五区育成会のメイン行事でもあります。七月初旬には父母と子供全員による海蔵川堤のネット張り、そして石拾いと準備に入ります。普段、縦のつながりの少ない子供たちもこの時ばかりは、一年生から六年生まで全員で練習に励みます。私たちの町では、子供が少なくなり、ここ数年は二年生まで選手として出場します。父母も練習時には当番制で協力します。

球技大会の当日、お天気も過ごしやすい日となり、子供たちも大張り切り。お母さんたちも飲み物の用意や応援と大変です。しかし、低学年の多いチームとあって、ソフトボールに至っては数年来一勝も上げられません。今年も善戦空しくフットボールと共に、初戦で敗退となりました。

監督さん、コーチの方々のお忙しい時間を縫っての熱心なご指導に報いるためにも、来年こそは一勝を目指して、頑張って欲しいと思います。

郷土史

郷土のおいたち

万葉集に「後れにし人を偲はく四泥の崎…」という歌があるが、この歌から、四泥の崎、つまり今の羽津志氏神社あたりが岬になっていた様子がうかがえる。そのころ、野田、末永、三ツ谷、羽津一帯は沼地、あるいは海中にあり、東西阿倉川の高台が岬になって海の中へ突出していた。人々は今の垂坂山の丘陵地辺り（志氏我野と呼ばれる）に住み、海草や魚などを採って暮らしていたと思われるが、これら乾魚や海草の類を貯える横穴の蔵を「海蔵（あくら）」と呼んでいたことから、今の名がついたといわれる。

大化の改新（六四五）後、国郡制がしかれたころ、当地区は郷界が横断し、三重郡芝田郷（末永村、野田村）と朝明郡額田郷（三ツ谷、阿倉川）に分かれて国の支配を受けていた。

また伊勢の地は十一世紀初頭から、平氏地盤として醸成されてきた所である。当地区にも阿倉川城があり、伊勢平氏館太郎貞康が居城していたといわれるが、源義仲火牛の計で名高い倶梨伽羅峠の合戦（一一八三）で、この貞勝が壮烈な死を遂げたことが、源平盛衰記に記載されている。

その後もこの城には館一族が居城し、地盤固めに余念がなかったが、織田信長の北勢進攻により、天正三年（一五七五）滝川一益に攻め滅ばされた。江戸時代に入ると東海道の整備が進み、江戸日本橋を起点に一里塚が設けられたが、三ツ谷村にも、その一つが置かれたという。参勤交代の大名行列や神宮への参拝などで往来はにぎわいをみせたが、村人たちにとっては必ずしもありがたいことではなかったらしい。当時大名行列などに必要な人馬を確保するため、伝馬の制度が定められ、一定の馬が各宿場に確保されていたが、参勤交代をはじめとする諸大名の通行が急増し、それに対処するため、伝馬の制度を補助する「加宿」「助郷」が設けられたのである。これらを課された宿場町周辺の村は、人馬を一定の日、あるいは臨時に差し出さねばならず、農家の忙しい時期にこれが重なると、村人は大変困ったといわれる。当地区では、末永、東・西阿倉川、野田がこれに当たっていた。

明治に入り二十二年（一八八九）、市町村制が実施されると、東・西阿倉川村、三ツ谷村、野田村、末永村が併合して海蔵村が誕生、さらに昭和五年（一九三〇）、それまでも隣接して密接な関係にあった四日市市と合併、現在に至っている。

（地区要覧より抜すい）

年表

年代	できごと
承安元年(1171)	舘太郎貞康　越中国新川郡より海蔵野に来て「阿倉川城」を築く
天正元年(1573)	阿倉川城主舘薩摩守貞清　浜田城主と戦う（阿倉川合戦）
天正３年(1575)	織田信長の北伊勢進攻により、阿倉川城落城
慶長９年(1604)	三ッ谷村に一里塚が置かれる
寛延３年(1750)	羽津村と阿倉川村が志氏我野地境問題で紛争を起こし、幕府裁決を下す
天明３年(1783)	海蔵川の洪水を防ぐため、郡奉行所に築堤を願い出で、亨和２年(1802) 完成する
明治３年(1870)	末永村の地主山中忠左衛門と浜一色の森庄吉が末永村水車に開窯（四日市萬古のおこり）
明治４年(1871)	長島藩士　堀友直が東阿倉川に開窯
明治８年(1875)	水車町に海蔵学校創立
明治22年(1889)	市町村制が実施され、東・西阿倉川、三ッ谷、野田、末永の５ヵ村が合併して海蔵村が誕生
大正11年(1922)	「いぬなし」「あいなし」、国の天然記念物に指定される
昭和４年(1929)	近鉄四日市－桑名間が開通（昭和３年）し、阿倉川駅、川原町駅が営業を開始
昭和５年(1930)	四日市市へ合併
昭和22年(1947)	私立海蔵幼稚園創立（24年市に移管） 市立北中学校開校（24年山手中学校と改称）
昭和27年(1952)	国道１号海蔵橋完成
昭和59年(1984)	海蔵地区市民センター移転新築

地区の特性

海蔵地区を代表するものとして、本市の代表的地場産業であり、通産省の伝統的工芸品にも指定されている萬古焼産業がある。

萬古焼は徳川時代、元文年間（一七三六～一七四〇）に、江戸に店を構える桑名の陶器問屋、沼波弄山が小向村（三重郡朝日町）に窯を開き、その製品に萬古不易の印を押したことに始まるといわれる。

この萬古焼が四日市のものになったのは、明治三年（一八七〇）、末永村大地主、山中忠左衛門がこの地に窯を開いてからである。

戦後しばらくの間は石炭窯が使われ、レンガの煙突が林立して、その眺めは壮観であったが、今はガス、重油、電気窯に変り、その面影はない。しかし、どこを歩いても突き当たるといわれるほど萬古焼関連業者が多く、石こう型、釉薬、絵付、製型、鋳込み、窯屋、御屋等の工場、商店が軒を並べている。

当地区は、全体に農、工、商、住の混在地域が多いところであり、近年、西部丘陵地に大規模な住宅地が開発されてきた。

（地区要覧より抜すい）

編集後記

地区広報「かいぞう」をお届けします。

多数の原稿、写真をお寄せ頂きありがとうございました。地区における行事及び催し物の、いくつかを写真とあわせてまとめました。

私たちの住む町が、明るくて快適な町であることと、より一層の親睦をはかり、今後の発展を望みたいと思います。発行にあたりまして、各種団体役員の皆様には、大変ご苦労お掛けしましたことを、感謝申し上げます。

編集委員会
海蔵地区市民センター